障サ協
広報紙

# 山口県障害福祉サービス協議会通信

発行：山口県障害福祉サービス協議会　広報委員会　〒753-0072　山口市大手町9番6号
電話：083-924-2799 FAX：083-924-2798　メール：syougai@yg-you-i-net.or.jp

【令和元年度　障サ協活動テーマ】
障害者福祉をどう地域社会にアピールし、我が事として定着させるか。

会員事業所紹介（第2回）

## 障がい者相談支援センターNSN

### 当事者が中心となる支援をめざして

広報委員が会員事業所を訪問し、支援現場の雰囲気に触れながら、職員や利用者との関わり、事業所の特色やアピール点、課題や悩み等についてお聞きする会員事業所紹介。

今回は、下関市でも近年大型の商業施設を中心として、商業的にも人口的にも大きく発展してきている新下関地区にある障がい者相談支援センターNSNを訪問し、所長の河本満幸さんに事業所の特色や課題、また現在の福祉に対する思い等についてお聞きしました。

**1．まず、事業所起ち上げの経緯等についてお聞きします**

この障がい者相談支援センターNSNの前に、まず、前身となるCIL下関の紹介をします。2001年7月28日にCIL下関を起ち上げました。（※CILはCenter for Independent Livingの頭文字です。アメリカで始まった障害者の自立生活運動です）障害のある人たちが地域の中で自分の力で生活出来ることが前提で、それを私たちは自立支援と呼んでいて、それを下関市で実施したいなと思い、起ち上げました。2001年5月には私は東京で1か月程CILの研修を受講しました。その後、2002年1月にNPO法人らいとを設立し、同年3月には事業所申請を行いました。当時は、障害者のニーズの実現というのは十分ではなく、私が参加した研修の中で、次のようなケースがありました。

母子家庭の方で本人はもっとお金を稼ぎたいというニーズがあり、当時の相談支援が入った結果、その家族がバラバラになって生活をするという事になってしまいました。

そういう風な事は起こしてはならないという事を心に強く誓いました。やはり私たちの団体が障害者のニーズ・地域で生きるという事をちゃんと山口県内で表明しないと障害者の未来はないなと痛烈に感じました。そこで福祉サービスを受けるために相談支援事業というものが不可欠なため、自前で相談支援事業所をつくろうという事で2005年に相談支援事業所を起ち上げました。やはりニーズというものはすごく大切なもので、それは障害者だけがもっているものだけではなく、健常者も同じようにニーズを持っていて、そのニーズが、障がいがあるが故に実現出来ない。だから福祉サービスがある。わがままとニーズは違う。当事者が中心となる事を最大限の目標として事業所を運営しています。

障がい者相談支援センターNSN
経営法人：特定非営利活動法人らいと（河本満幸理事長）
実施事業：相談支援事業所、居宅介護事業（河本満幸管理者）
〒751-0872　下関市秋根南町1-1-5
TEL 083-263-2687　FAX 083-263-2688

**2．今、河本さんが一番大事にしている事はなんですか？**

やっぱり障害者のニーズですね。ニーズはわがままではない。障害者の生き方は基本的にこうでないといけないという事はあり得ないと思います。例えば、就労希望のある人が就労継続支援事業所A型・B型に行かなければならないという事ではないと思います。障害者の方が多様な生き方が出来るような社会になる事を望んでいます。事業所を起ち上げる時に、私たちは何がしたいかを明確に決めました。それはどういう事かというと、当時、障害者手帳を持っている人が人口の約5％で、それ以外の人（障害者手帳を持っていなくても障害のある人）を含めると一定数の障がいのある人が地域で生活していることが推測される中で、街の中を歩いていても、障害者の人にそんなに出会わない。10人に1人は出会うかといえばそうでもない。そんな社会はおかしいのではないか。街の中でどこを切り取っても障害者がいる、そんな街にしたいという思いをみんなに伝えました。その事を共感して賛同してくれた人たちが今一緒に仕事をしているメンバーだと思っています。

笑顔で対応していただいた
河本満幸理事長

**3．法人・事業所の事をお聞きします**

障害のある人も健常者も一緒になって働いています。職員は、居宅介護事業のヘルパーも含んで30名くらいいます。精神障害のある人や車いすの方もいらっしゃいます。

事業所内部の様子
障害のある人も健常者も
一緒に働いている

**4．相談支援事業で今抱えていらっしゃる件数は？**

件数は100件いかないくらいです。なぜ少ないかというと、私たちはニーズという事を考えるとそんな多くの件数は受け持てないと思っています。重度の障害者の方のニーズを考えた場合、回数を重ねて訪問する必要が出てきます。多い時は月に5～6回訪問する事も少なくありません。精神障害の方もですが、頻繁に会って丁寧な支援が必要になってくるので、そんなに件数は持てないと思っています。逆に、私たちの団体が重度の利用者の方のニーズを支えていると思っています。志として、最も不利な人に手を差し伸べる事が出来るというのは私たちの団体のプライドであり、役割だと思っています。重度の障害者の方を支えることは、私たち以外は出来ないと事業所の職員は思ってくれていると思います。

**5．三障害一元化という事に関して、どう感じていらっしゃいますか？**

当法人・事業所の出発点となったＣＩＬ下関という団体はクロスディスアビリティ（障害の種類や程度を超えて支援をしていくという意味）を基に支援を始めました。私たちの団体は当然三障害一元化を意識して支援しています。三障害一元化が国で言われるようになる前の20年前から取り組んでいます。

三障害一元化が当たり前になるには、事業所に障害がある人を正規職員として採用して、その人のニーズを追求する事。障害のある人が変わることは難しいという事は前提であり、誰が変われるかというと、それは周りであり支援者であると考えます。一人ひとり違う障害者の方を理解して、その方々にあった支援やニーズに応えていく必要があると思います。

**6．今、障サ協でも三障害一元化という事に力を入れて発信できればと考えていますが、日頃の取組の中から発信する工夫等を教えていただければと思います**

精神障害の方は、働きたいけど朝起きられないというような事が多くあります。その辺の特性をちゃんと掴まないといけない。例えば、1週間休めば出勤出来るかもしれないという人には休んでもらいます。そうする事で障害者の方が自分で障害そのものを受容出来るような環境になるので、それでまた次から仕事に来られるかもしれない。また、その人にあった仕事を提供するようにしています。例えば、デスクワークが得意な人にはその仕事を提供します。最初から団体がその人に与えるのではなく、本人の特性を団体が掴むことが大切。その人にあっていない仕事を無理やり提供してもちょっと難しいです。本人の特性にあっている仕事を用意するという事は団体として勤めだと思います。

**7．就労移行支援事業では、企業側の受け入れ態勢が整っていないという悩みがあると聞きます。企業側や社会にアピールするにはどういった工夫が必要でしょうか？**

どの事業所でも障害者を受け入れなければならないので、例えば、青年会議所や商工会といった所に理解をしてもらう必要があると思いますが、今の時代、障害者権利条約も制定した中で、障害者を排除する事は差別だと言われる社会です。もう時代が明らかに排除する時代ではないという事を事業所がしっかり理解しておかないと、その事業所が社会からドロップアウトしてしまうと思います。それから就労移行支援事業所の人たちにも言いたいんですけど、ハローワークをもっと上手に使った方がいいと思います。ハローワークは障害者の担当者を決めているので、連携して障害者の仕事を探してもらった方が良いです。自分の事業所だけで抱え込まないで色々な所と連携していく事が大事だと思います。東京大学の准教授で熊谷晋一朗さん（山口県出身）という方がいらっしゃいますが、その方が「自立とは依存先を増やすこと。助けてもらう先をたくさん作るんだ」と言われています。支援者の自分たちが抱え込むのではなく、連携をとってみんなで支援をしようという考え方が私はその人を幸せにする近道かなと思います。どんな些細なことからでも交わっていく事が大切だと思っています。

障害者の自立支援への思いを
熱く語っていただきました

**8．三障害一元化のお話から多くのことを学ばせていただきましたが、河本さんが今、御苦労されている事はありますか？**

それは、人材です。私たちは人を研修して育成するシステムは持っています。今在籍している職員も初めは知識がない状態で来ています。でも1年経つと様々な事が出来るプロフェッショナルになる事ができます。そういう人たちを育成する事は出来ますが、団体にたどりついてくれないと育成も出来ない。人材がたくさん来れば育成して多くのプロフェッショナルを輩出する事が出来ます。どんな未経験者でも構わないと思っています。今ヘルパーで働いている人の中にも発達障害の方もいらっしゃいます。その障害者の方の特性に合わせて研修をしています。ヘルパーの仕事は、回数を重ねれば覚えることは出来ます。ただ、その精神労働というものは物凄く負担で、今まで何度か精神障がいの方をヘルパーとして試みてみましたが、いずれもうまく行きませんでした。でも僕たちは諦めることはしません。相談支援事業所の名前であるＮＳＮはネバー・セイ・ネバーの略で、決して諦めないという意味です。事業所として、諦めないという事を言っていますが、本人さんたちが無理だと言えば配慮しています。

**9．最後に伝えたい事はありますか？**

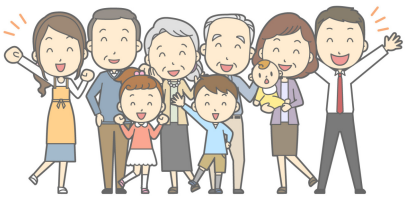
障害者も健常者も一緒になって交わった社会、

インクルーティブルな社会を実現出来たら良いなと強く思ってます。それは障サ協しか出来ないと思っています。

**取材を終えて…**

前身の団体から事業所の設立経緯までたくさんのお話を聞かせていただきました。河本さんの語られる「福祉に対する思い」に、ニーズの大切さや、一人ひとりの障害者に丁寧に支援をしていく事の大切さを学ばせていただきました。また、障害者も健常者も一緒になって交わった社会の実現のためには障サ協が出来る事は何かと強く考えさせられた訪問でした。

（広報委員　手島憲二）



## 座談会（第3回）
# 新人職員が語る支援現場への思い【最終回】

シリーズで掲載しております座談会「新人職員が語る支援現場への思い」。第1回は障害者福祉に携わるきっかけ、第2回は仕事に就いてからの不安や悩みについてお話しいただきました。最終回となる今回は、職場で目標とする人についてお話しいただいた内容を御紹介します。

**山田**　では次の質問で、職場で目標としている人はいますか？

**宮地**　うちのリーダーの方です。すごく長く勤めてらっしゃるのもあるし、聞けば答えが必ず返ってくる。いろんなことを拒否される方がおられて、何でスイッチが入るとか分からないです。その方が食事の拒否をされた時も、どうしたらいいのか相談すると、駆け引きのやり方とか利用者への接し方を教えてくれるし、休憩時間も「今、○○さん行ってきて」とか全部できるすごい人です。

なごみの里
宮地秀子さん

**山田**　すごい方ですね。平井さんは目標とされている方はいますか？

**平井**　女性棟の棟長です。時間内に仕事を終わらせるし、絶対に期限内に仕事を終わっているし。その方は以前7人位担当されていたけれど、それでも期限内に絶対仕事が終わっていたから、本当に凄い人。

**山田**　その方はどんなやり方をされてらっしゃるか分かりますか？

**平井**　全然わからないですけど、見に行ったら終わっているという感じ。どういう時間の使い方をしているのか全く分からないです。

**山田**　中村さん、目標とされている方はいらっしゃいますか。

**中村**　事業所内の、特定の人物じゃなくって多数の人です。自分が福祉の知識がなさすぎるので。

**山田**　どんな方達ですか？

**中村**　障害者支援をするにあたっての視野の広さだったり、声の掛け方だったり、支援のやり方だったり言葉遣いだったりとか、全部です。

**山田**　今経験を積まれていると思いますけれど、経験を積んでそういう人たちになりたいなと思いますか。

**中村**　なれるというビジョンがまだわかないですね

**山田**　今現在経験を積んでいって、こんな支援者になりたいなあというイメージがありますか。

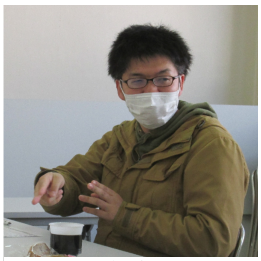
**中村**　そうですね。事業所全体をちゃんと把握できて、もっと視野を広く持って、一人ひとりの障害特性を理解していきたいと思います。

**山田**　じゃあ、一人ひとりを理解できる支援者になりたいなということですね。神徳さんは目標とされている方いらっしゃいますか？

**神徳**　事業所内でいますね。先ほど中村さん、平井さん、宮地さんが言われた通り、すごく効率が良い方で、元々前の仕事で美容師をされていたので段取りがすごいですよ。入浴や食事を嫌がられる方も、その人が行くと普通に誘導できていつの間にか終わっているので。その人はいつも2つも3つも先のこと常に考えて行動しています。それで、常に利用者のことも考えてやっているから、利用者のこともよく知っています。1週間の予定が全て頭の中に入っていて、流れが全部頭に入っているから時間の使い方がすごく上手です。余った時間は他のことに使うとか、職員のことを考慮した上で配置とかも毎回毎回考えていてすごいなと思いますね。

**山田**　経験を積んでそんなふうになりたいですか？

**神徳**　なりたいですね。



ゆうあい
神徳貴夫さん

**山田**　宮地さんは、目標とする人はおられますか？

**宮地**　最初入った時はリーダーが怖いなと感じましたが、全然そんなことなくて今はすごく好きで、すごく尊敬しています。

**山田**　宮地さんは経験を積んでこうなりたいなぁとか、こういうふうになりたいなっていうのはありますか？

**宮地**　そのリーダーみたいにはとてもできないですけど、私がいつも気をつけているのは利用者さんと一緒にいるときは利用者さんが笑ってくれたらそれでオッケーと思っています。だからそうなれたらいいなと思います。

**山田**　利用者さんは幸せですね。平井さん、将来こういうふうになりたいというのは、ありますか？

**平井**　時間配分ができるようになりたい。どんな作業でも時間内に終わらせないといけないと思います。

**山田**　そうですね。最後の質問になりますけど、将来こんな支援者になりたいという思いを伺いたいと思います。平井さんは今回お怪我で辞められますが、「こんな支援者になりたかった」や今後戻ってくるかもしれないので「こんな支援者になりたい」というのを教えてください。それでは宮地さんからお願いします。

**宮地**　安全・安心、快適な支援が出来るようになりたい。その方その方の障害特性に合った支援が

出来るようになりたいです。利用者さんの思いを汲み取れるような支援者になりたいです。

**平井**　私のところの利用者さんは大体どこかの施設から移動してきた方が多いですけれど、最近「前のところがいい」とか「職員の言い方きついと」と言われることがあるので、今後ないように。行ったら安心するとか楽しいとか思ってもらえるような施設になると良いと思いますね。

**山田**　個人的にどういう支援者になったら利用者さんに喜ばれるようになりますか。例えば宮地さんが言われていたようにみんなが笑ってくれるようにとか。

**平井**　事務的な事に追われて利用者さんと関われてないことがあるので、関われたら楽しいとか、この人なら信頼できるとか思ってもらえるようになれたらというのはありますね。

柳井ひまわり園
平井奏美さん

**山田**　神徳さんいかがですか。

**神徳**　実習生の方が来られてもお手本になれるようになりたいと思いますね。どうしても仕事をしていると自分のぼろが出るというか、日頃プライベートで友達と話している感覚になってしまうので、それが当たり前になっている部分があります。それを実習生の方のレポートで気付くこともあるので。外から言われないと気づきかでないので、言われないような人になりたいです。あとは視野が狭いので、視野が広い人になりたいです。

**山田**　中村さんいかがですか？

**中村**　2個あるんですけど、1個は利用者の方に「この人がいたら安心だな」って思われるような支援者になりたい。もう1個はもっと知識をつけないといけないですけど、支援する利用者の先のことを考えながら支援できる人になりたいです。担当じゃなくても利用者が入所になるとか、10年後20年後にどうするかとか、お父さんお母さんが亡くなった後どうするかとか、いろいろ先を考えて支援していきたいです。

セルプときわ
中村亮太さん

**山田**　先の生活を考えるということですね。ありがとうございました。話がつきないですが、そろそろ時間ですのでここで座談会を終わりたいと思います。皆さんからたくさんご意見をいただいたので嬉しかったです。なんだかんだ言って皆さん同じような悩みを持ってらっしゃいましたね。知識をつけて利用者さんに幸せになってもらいたいという思いが伝わってきて嬉しかったです。皆さん今後ともよろしくお願いします。困ったときはぜひ助け合って、乗り越えていただけたらと思います。今日はありがとうございました。最後に会長からまとめの言葉をよろしくお願いします。

**会長**　私たちは人を支援する仕事をしているので、相手に敬意を払わないといけない。障害があっていろいろと覚束ないこともあるかもしれないけれど、生活年数としては30年40年の方もおられる。それを基本としないといけない。相手が人なので、技術がその方々にキチッと当てはまるか分からないので、まず敬意を払ってしっかり利用者と接することが大事。そして、社会に対してどう考えるか。一般社会の人がどうやったら障害者福祉に関心を持ってくれるかとか、地域社会との関わりでこういうことに苦労したとかも考えていきたい。これは、次の座談会のテーマに出来れば入れたいと思う。話が展開して盛り上がって良かったです。今日はどうもありがとうございました。

（おわり）

## インタビュー（第3回）
# 社会から見た障害福祉サービス事業所
## 出入りの業者の方の声

本会の活動テーマである「障害者福祉をどう地域社会にアピールし、我が事として定着させるか」を考えるために、社会の障害者福祉に対する意識を事業所の出入業者の方へのインタビューから探ります。

今回、お話しをお聞きしたのは、防府市にあります英友総合設計事務所　設計部長の田中宏明さんです。聞き手は、本会広報委員の今元雅浩です。

**今元**　まず、私たちの事業所も含めて、これまでに障害福祉系のサービス事業所に行かれた時の、第一印象はどんな感じでしたか？

**田中**　そうですね。多分今回、社会福祉法人蓬莱会に関わったのが、私が障害福祉サービス事業所への初めての関わりだと思うんですよ。どういった所なのかなという、本当にまっさらな気持ちで伺ったんですけど…第一印象かぁ…そうですね…意外とこう、普通だな、という。

**今元**　そうなんですね。

**田中**　はい。なかなか障害者と関わることが少ないから、引いていたというか、なんかちょっと、一見怖い印象を受けていたという話もちょこちょこ聞いたりはするから。

**今元**　そういうのは特にはなかったですかね。

**田中**　そうですね。

**今元**　今まで、蓬莱会に仕事で入られる前に、障害者の方と関わりがあったという訳でもないんですよね。

**田中**　そうですね。本当にないですね、これまで。

**今元**　そうなんですね。それで今、普通って仰ったんでなかなか次の質問にお答えいただくことが難しいかもしれませんけど、2番目として、障害福祉サービス事業所に出入りする前と後での印象の違いをお聞きしたいと思います。今「普通だった」とお聞きしたんですけど、何か印象の違いっていうのはありましたか？

**田中**　そうですね、今回、関わり方としては設計で関わったというのがあるので、やっぱりこう、違

いっていうのは結構あって、壁の厚さだったり、職員から利用者の方々の色々な話を聞くと、普通の住宅とか商業施設ではしないようなやり方をするので、ということでしょうね。前と後の印象ですかあ。そうですね…始めはあんまりそう、色んなイメージを勝手に持たないようにいったので、逆に偏ったイメージにいかずに、まず行ってみてどうなのかということを思っていました。実際に伺ってみると、利用者の中には、壁を殴りまくって、扉を突き破るとか、そういうこともあるんだな、というのは感じましたね。

**今元**　一般住宅ではあまりない光景ですよね。

**田中**　だからまあ、結構特殊な、設計としては色々と特別な配慮をしていなかないといけないなあという印象を受けましたね。

**今元**　出入りしていただくようになって、直接関わらせていただくのは、主に職員だから利用者さんと直接というのはなかなかないですけど、来られた時に、利用者の様子を見られる中で、もっちょっとこんな感じだったら出入りしやすい、もうちょっと敷居が低くなるのになとかありますかね？ますます地域に開かれた福祉施設にしていくためにも。

**田中**　私たちも頻繁に施設に伺っていいのかなぁと思うんですけど、施設のお祭りとかに顔を出させてもらって回数を重ねていくと、印象はだいぶ変わってくるのかなあという風には思います。ただ、私もあまり日常的に普通にリハビリされているとか、そういったところにしっかり入って行くというのはあまり経験がないので、ただ、福祉施設として、どんどん開いて地域と密着していかなければいけない部分と、すべてがそうじゃない部分ってあると思うので、そこら辺のさじ加減って難しいですよね。設計する中でも、すべてがオープンだとやっぱり難しい部分があって、隠すって言い方は語弊があるかもしれませんけど、クローズする部分とオープンにしていく部分というのが、しっかりメリハリが付いているといいのかもしれないなとは思います。

**今元**　そうですね、確かに。こちら側も開かれたと言っても、誰でも彼でもふらっと寄れるようになるのもいいんでしょうけど、それはそれでどんな人が来るかっていうのが、今の時代なかなか怖い部分もあるし、難しいところではありますけど。

**田中**　難しいですよね。

**今元**　私たちとしても出来ているのは、さっき言われたような祭りだったり餅つきだったり、行事を行うことで地域の方や一般の方と関わりを持てる機会を作ることしか今の所出来てなくて、なかなか普段ふらっと誰かが遊びに来るっていうのは、関係者や保護者など、何かしら関係のある方しかいらっしゃらないので、真に誰もに開かれた福祉施設づくりは確かに難しいから、この部分だけは地域の方であれば誰でも使えますよみたいなものがあればまた、もっと入りやすいのかなと思う部分があります。

**田中**　そうですね。ただ、普通の家庭でもあんまり、そこまで上手く交流とかって最近なかったりするじゃないですか。福祉施設関係なくですね。確かに、全部っていうよりは、場所が分かれていて、ちょっとそこに誰でも来られて、そこに利用者もふらっと来て、その時に交流できる、みたいなものがあれば良いのかもしれないですね。がっちり交流ってなかなかハードル高いと思うんですけど、ゆるやかに重なって接点が増えていく位の形がいいのかもしれないですね。

**今元**　そうですよね。

**田中**　祭りは祭りでありながら、そうじゃないゆるやかな交流があっていくことで、実際に会って顔を合わせていくと、印象が変わっていくことがあると思います。

**今元**　そうですね。なかなか関わってもらえないと分からない部分があって、どうしてもテレビとかに出てしまう印象だけで世間は見られたりするので、それをどう、もっと関わってもらって分かってもらうかというところは、僕ら福祉サイドの努力なんでしょうけどね。

**田中**　意外と知らなかったですね。これだけ色々な福祉施設があって、地域と交流する取組があるということは。

**今元**　わかりました。最後の質問ですが、今までの質問と多少似ている部分もあるんですけど、単純に私たちの法人の事業所に来られて思ったこと、感じたことはありますか？

**田中**　パッと見はすごく活気があるなという印象はありましたね。若い職員さんも結構多いし、職員の年齢は比較的若いんですかね？

**今元**　そうですね。うちは施設長がまだ40代半ばで、その次の僕たちが40歳前後なので、それより上の職員があまりいません。また、僕らより下の役職となるともっと若くなって、主力として現場で支援を行っているのは、ほとんど30代、20代になるので、確かに年齢層は若いですね。

**田中**　それは、福祉業界としてなんですか？それとも、こちらの蓬莱会が特に若いということなんですか？

**今元**　もちろん同じような法人もあると思うんですけど、蓬莱会は結構若い方だと思います。50代、60代の方が多くおられる法人さんも結構聞きますが、うちは法人自体が比較的新しくて、今19年目なので、当時20代で入った職員がそのまま今、40代になっています。設立から長い法人では20代で入った人が今60代くらいになっておられるんですけど、うちの場合は法人自体もそれなりに若いっていうのもあるんだと思います。

**田中**　それはちょっと思いましたね。じゃあ若い人は集まってくるんですか？法人に若い人が多ければ集まってきますよね。

**今元**　そうですね。でも今、福祉の方は担い手がどんどん少なくなってきているので、ここ最近は、職員を募集しても人が集まらなくなってきましたね。時々、年配の方が入ってこられることもありますけど、法人には僕らよりも年下の職員が多いので、どうしても全体的に若い感じにはなっているとは思います。このまま推移していけば10年後、20年後には主力が40代、50代になっているんだと思います。まだ職員は若いですが、若い力を結集して職員一丸となって、これからも利用者支援、地域交流を進めていきたいと思います。

　インタビューは以上になります。本日は、ありがとうございます。

**田中**　ありがとうございました。

2019年（令和元年）10月25日発行

## 会長・副会長会議（第２回）開催

令和元年9月32日（火）山口県社会福祉会館において開催しました。

今回は、今年度の会長表彰の選考、要望事項の作成、加入促進について協議を行いました。

会長表彰の選考では、本会の表彰規程（障害福祉サービス事業所・施設10年以上勤務し、40歳以上の者）に基づき、会員事業所・施設から推薦のあった５名全員の受賞を決定しました。

要望事項の作成では、６月10日（月）の第１回総会に引き続き行われた部会での協議を踏まえ、今年度の要望事項を次のとおりまとめました。この要望事項は、自由民主党山口県連、公明党政策懇談会、山口県知事に提出します。

### 令和元年度　要望事項

**【就労支援事業】**

1　就労系事業所等への発注金額のうち障害者工賃を障害者雇用率に特例的に算入する「みなし雇用」の導入
2　就労継続支援事業所B型での福祉的就労に対する報酬設定の見直し
3　重度障害者支援体制加算Ⅰの要件緩和
4　就労継続支援事業所における働くことの前提となる生活支援に対する評価の検討
5　共同受発注窓口等の中間支援組織が就労継続支援事業の核となる環境整備の推進
6　就労系事業所での利用者誘引行為及び就労斡旋行為の具体的内容の明示
7　就労定着支援事業の課題整理と必要な対応の実施
8　就労実績の高い事業所が不利にならない適切な措置の実施

**【生活介護事業】**

1　強度行動障害による施設建物、設備の修繕、改修についての対策
2　生活介護事業所への空き家利用の基準緩和
3　三障害一元化の理念と利用者の高齢者対策の実現

**【地域生活支援事業】**

1　グループホームが行う日中支援に関する報酬の創設について
2　グループホームでの栄養管理、食事提供に関する加算や報酬の創設

**【自立訓練事業】**

1　宿泊型自立訓練における地域移行の評価

**【相談支援事業】**

1　相談支援事業が安定して継続運営できる基本報酬の増額
2　相談支援専門員の業務体制の見直し

**【児童発達支援事業】**

1　福祉と教育の連携促進
2　地域差のない指標による判定の実施
3　年次有給休暇の時季指定取得が事業所の減収に直結しない仕組みづくり

## 広報委員会（第２回）開催

令和元年10月21日（月）山口県社会福祉会館において開催しました。

委員会では、今年度リニューアルを行った本紙「障サ協通信」の振り返りや、今後の内容充実に向けて協議を行いました。

特に、座談会は、今号で「新人職員が語る支援現場への思い」が終了したことを受け、次回は広報委員のメンバーを中心に「三障害一元化の良かった点と課題」をテーマとして実施することとなりました。

そして、今号で第２回を掲載しました会員事業所紹介は、会員が参加する広報紙づくりをめざし、引き続き実施とすることといたしました。

また、障サ協の広報活動の課題となっているホームページの開設について、令和２年度当初からの開設に向けて作業を進めることを確認しました。

今後も障サ協の広報、障害者福祉の地域社会へのアピールに向けて活動を進めてまりますので、広報活動について会員の皆様から御意見をお寄せください。

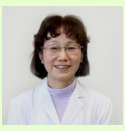
## 山口県障害福祉サービス協議会　研修会のご案内

### 精神障害のある人はどのように回復していくのか
### ～人(あなた)にしかできないことがある～

精神障害のある人への治療・支援は、入院・外来診療、デイケア中心だった時代から地域ケアへと移行し、障害福祉サービス事業所も「地域の中で自分らしく生活する」「その人なりの生き方や権利を取り戻す」という時代の目標に向け、様々な支援を展開しつつあります。しかしながら、精神障害のある人たちは、その疾患や障害の構造の複雑さから、今なお社会での生きづらさを抱えています。

そこで、精神障害のある人の地域生活支援の現場で起きている個別性ご満ち、波瀾万丈であって、ドラマチックな展開を共有し、どのように回復していくのか、支援者が出来ることは何かを感じることを目的として開催します。

日　時：令和2年1月17日（金）10:30～14:30
会　場：山口県社会福祉会館　大ホール
参加費：障サ協会員3,000円/人、非会員6,000円/人
講　師：帝京平成大学大学院
　　臨床心理学研究科
　　教授　池淵恵美先生



内　容：
【AM】精神障害のある人のこころ・脳機能・人生の観点から「回復」するということ、どう支援していくのかについての講義
【PM】精神障害のある人を支援するにあたっての参加者の課題や疑問に対する先生の解説

※近日中に開催要項等を会員に発送いたします。